

思わぬ出会い

井口昭久

高齢者の日常生活の機能を評価する方法の中に「一人で買物ができる」という項目が入っている。一人で買物ができない人は一人で生きていけない。

私は妻が働いていたので若い頃からスーパーへ通っていた。野菜やシャンプーを買うお事だったので、商品に興味はなかった。キュウリとナスの違いは分かっていたが、レタスとセロリが判別できなかった。最近までレモンとメロンもどっちが果物か判然としなかった。いつも「レタスはどこですか？」と店員に聞

いた。あれこれ品定めをしないので、滞在時間は短かった。目的の品物に辿りつくと、奪うようにして手に取りレジに向かった。

レジでは下を向いていた。あの頃のスーパーでは男が人目を避けていた。逃げるようにして買物をする習慣が身に付いていた。

シャンプーを買って家に帰ると妻が言った。「何のシャンプーを買ってきたの？」みれば犬のシャンプーだった。犬にシャンプーを使うことがあるとは知らなかった。それ以来、犬のマークのある品物には手を出さないよう

になった。

「あら先生、先生でもスーパーに来るの？」50歳代の女性に出会った。その人は私の所へ通っていた糖尿病の患者で、間食で甘い物はもう絶対に食べないわーと固く約束して帰った人だった。買物籠にお菓子が沢山入っていた。買った品物を見られることは、おへその傍の皮膚炎の痕の色素沈着を覗かれたように、恥ずかしい気分になる。恥ずかしそうに買物籠を後ろに回した。

その後彼女に出会うことはないが、私の姿が見えると逃げているに違いない。

この頃は、自分の目的を持ってスーパーへ出かけるようになった。セロリとレタスが分かるようになった。

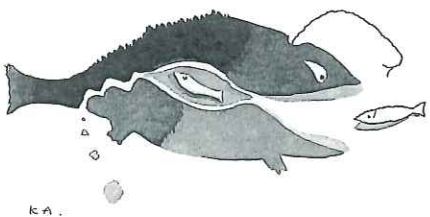
午後の大学のクリニックの外来が終わり、近くのスーパーへ行った。その日は親子どんぶりを作ろうと思っていた。卵を買うために卵が置いてある棚を目指した。先ほど診た患者が棚の傍にいた。私は思わず押し車を反対

方向に回転して逃げた。患者も私の姿を見て逃げた。

逃げきったと思った時に、「先生ー」と呼ばれた。傍らに大学の事務局長がいた。背広にネクタイをして、黒い革靴を履いて、赤い買物籠を提げていた。男同士の立ち話はお互いに避けたかったのですぐに分かれた。

レジで待っていると

きに横を向くと、不愉快そうな顔をした痩せた人がいた。会いたくない人のような気がした。一瞬、気まずい雰囲気があった。口を真一文字に結んで立っていた。レジの柱に、全身が映る鏡が置いてあった。何気なく横を向いたときに自分の全身が映ったのだった。



井口昭久 1943年長野県生まれ。名古屋大学医学部卒業後、同第三内科入局。愛知医科大学講師などを経て'78年ニューヨーク医科大学留学。'93年名古屋大学医学部老年科教授。名古屋大学医学部附属病院長を経て現在、愛知淑徳大学教授、名古屋大学名誉教授。『鈍行列車に乗ってー医者人生ソロソロ帰り道』(風媒社)など著書多数。